

スピリチュアルケアの諸相(3)

—— キッペス理論をめぐって ——

打 本 弘 祐

キーワード：スピリチュアルケア，宗教的ケア，パストラルケア，
 ウアルデマール・キッペス（Waldemar Kippes），
 親鸞浄土教

目次

序文

第三章 ウアルデマール・キッペス氏のスピリチュアルケア理論

小結

序文

本稿は前々稿「スピリチュアルケアの諸相（1）窪寺理論をめぐって」並びに前稿「スピリチュアルケアの諸相（2）大下理論をめぐって」に続き、日本におけるスピリチュアルケア理論の俯瞰図作成を目的とした論考の一部である¹⁾。その為、本論文は第三章となる。

本邦において多くのスピリチュアルケア理論が発表されている中、筆者は窪寺俊之氏，ウアルデマール・キッペス氏（以下，キッペス氏と略す），村田久行氏，大下大圓氏のスピリチュアルケア理論を考察対象としている。すで

1) 『桃山学院大学社会学論集』第44巻第2号並びに第45巻第1号参照のこと。

にその理由は述べたが、確認する意味で再掲しておく。

- ① 四氏はキリスト教（カトリック／プロテスタント）、哲学（無宗教）、
仏教（真言宗）というようにそれぞれが異なった背景を有しているという点。
- ② 四氏ともスピリチュアルケアを臨床現場で実践してきた経験を持っているという点
- ③ 四氏が自らのスピリチュアルケア理論を書籍等で体系化して論じているという点。
- ④ ③を基礎として、スピリチュアルケア提供者²⁾育成プログラムを持っており、それが定期的に開催されているという点。

本稿ではキッペス氏のスピリチュアルケア理論（以下、キッペス理論と略す）を取り上げて考察する。

第三章 ウアルデマール・キッペス氏のスピリチュアルケア理論

キッペス氏はドイツに生まれ、1956年に来日したカトリックの神父である。鹿児島で司牧に携わったことを契機に鹿児島大学、上智大学、南山大学等で講師を務め、久留米聖マリア学院大学教授を歴任した。また、東京「いのち

2) 筆者がスピリチュアルケア提供者を表記する援助者の呼称については、前々稿で述べたので、そちらを参照して頂きたい。なお、キッペス氏は「スピリチュアルケア・ワーカー」の呼称を用い、その理由として「スピリチュアルケアを提供する職業は〈チャプレン〉と言うが、日本社会の医療制度にはチャプレンの職務が伝統的にほとんどないため、本書ではスピリチュアルケア・ワーカーの表現を用いている。スピリチュアルケア・ギバーやスピリチュアル・カウンセラーの表現も使えるが、〈ギバー〉は「上からの」イメージが強く、またスピリチュアル・カウンセラーは宗教的な概念を想起させる恐れがあるため使っていない。」としている（キッペス [2009] iv）。しかし、キッペス氏が理事長を務める臨床バストラル教育研究センターでは、臨床バストラルケア・カウンセラーという資格名が使われており、整合性が見られない。

の電話」スーパーヴァイザーや、姫路聖マリア病院での臨床パストラルケア教育ならびに、1998年1月に設立された臨床パストラルケア教育研修センター所長を務め、2007年より臨床パストラルケア教育研究センター理事長として日本のスピリチュアルケア、パストラルケアの普及に尽力している。

スピリチュアルケアに関する書籍の他にも多くの著作があり、人間関係とコミュニケーション、人間の本質を論じた著作、キッペス氏自身の闘病記と、闘病中に自身の内面で起こったスピリチュアルな出来事を綴った著作もある。ただし本稿で中心的に取り扱うのは、あくまでキッペス氏のスピリチュアルケア理論（以下、キッペス理論）である。よって『スピリチュアルケア―病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア―（以下、キッペス [2010 a]）』と、『スピリチュアルな痛み（以下、キッペス [2009]）』を主要文献として取り扱い、論考を進めていくこととする³⁾。

第一節 キッペス理論における人間理解

本節において論じようとするテーマはキッペス氏の人間観である。まず、前稿や前々稿において論じた「スピリチュアリティ」に関して、キッペス氏がどのように扱っているかを先に論じておきたい⁴⁾。

キッペス氏がたびたび引用し重要視しているのは、1990年に出された「WHO 専門委員会報告書第804号（以下、WHO [1990] と略す）」である⁵⁾。このWHO [1993]におけるスピリチュアルとその訳語を付き合わせる作業を行い、ドイツ語や、英語を例に挙げつつ、日本語（特に漢字）における霊（靈）の字義や用例に注目する。「世界的にスピリチュアルや霊的は日常用語であるのが、日本においてはそれらの語が違和感を覚えるものとなっている」と

3) 本稿では改訂版であるキッペス [2010 a] を用い、1998年版は参照しない。

4) 諸分野に跨がるスピリチュアリティの議論は、拙稿 [2009 a] を参照して頂ければ幸いである。

5) WHO [1993] 参照。

指摘している。更に、スピリチュアル／スピリチュアリティなどの言葉は、キリスト教の用語として数多いものであるが、日本のカトリック教会においては、忠実に翻訳されていないことや、時に霊や魂と訳されるべき言葉が省かれてしまっている事実を明かし、いかにスピリチュアルや、霊（靈）、霊的という言葉が日本語に翻訳しづらく、違和感を持たせるものであるかを論じている⁶⁾。このような言語分析は、キッペス氏自身が、ドイツ人として日本語文化に生きつつ、文化の隙間を埋めんが為に起こってきた問題なのではないかと筆者は考える。すなわちキッペス氏の翻訳に関する厳密な姿勢は、ドイツ人宣教師として日本語文化圏で生きることと、カトリックの信仰に生きることの二重の意味があり、それはまさに生きることそのものに繋がる重要な行為である。

このようなキッペス氏の経歴は、人間観にも影響を与えている。キッペス氏はドイツ語、英語、日本語の文化圏において、人間についての表現が各々異なっており、それが言語体系の違いに基礎付けられたと指摘している⁷⁾。加えて、WHO [1990] の基礎となっている人間観が、ユダヤ教やキリスト教の伝統から成り立っているとも指摘している。

そのようなキッペス氏による人間観は、六つの次元から成り立っている。それは身体／知性／心理（精神）／心／霊／魂であり、それぞれが異なった層を成しているが、それら六つの次元が全体として統合され一人格が成り立っているということを前提としている。キッペス理論を採る前段階として、六つの次元にもとづく人間観を考察しておく。

まず六つの次元と簡単な解説をまとめておきたい⁸⁾。（なお、各次元に関連づけられ論じられている「痛み」と「叫び」は略す⁹⁾）

6) キッペス [2010 a] p 9 および p 23～25

7) キッペス [2010 a] p 31～32

8) キッペス [2009] p 153～154

9) キッペス [2009] p 93～98 には「痛み」と「叫び」の例が挙がっている。キッペス氏は「痛み」と「叫び」を使い分けている。しかし、それらに対する定義付け

「身体」……………身体のこと。臓器や筋肉、脳も含まれる。

「知性」……………知力・知能・知識・理解力・知恵・英知・考え・理性など¹⁰⁾。

「心理」……………本能・衝動・情緒・感情・気分・機嫌・気持ち・feelingに基づく行動をする。

「心」……………自由意思・善悪の判断・良心・善意や悪意・真心・真実(真理)・誠実、献身や(順境や逆境における)忠実・誘惑・賞罰・罪悪・責任感。つまり倫理観と道德観の領域である。

「霊(spirit)」…五感で体験できる現実を超えたものを意味付ける(哲学・人生論・人生の意味・理念)領域である。
尊敬・信頼・信仰・感謝・希望など。

「魂」……………不滅な自分・自我・自分自身・私・全身全霊。

キッペス氏は、これらの関連性を、大きな五層を成す同心円によって説明している。

まず、一番外周にあたる層に身体が配置され、内側の三層に対してそれぞれ知性／心理／心が配置される。そして一番中心の層には魂と霊(spirit)が

や説明は成されていない。ただ、「〈痛み〉は〈叫び〉を生ずる」と言う(キッペス [2010 a] p 88)。筆者は「痛み」と「叫び」を次のように理解している。「痛み」とは、患者が心の中でスピリチュアルな「痛み」を内面に抱えており、苦しみのまっただ中にある状態である。この「痛み」の状態は、「痛み」それ自体を患者が言語化出来ていない状態、と理解する。「痛み」の内実を自己の言語体系にもとづいた患者なりの言葉で、他者に伝えようとするものを「叫び」として解釈している。なお、「叫び」というと、声となって発せられたものとして受け止められがちであるが、筆者の「叫び」の理解は声だけに限定されない。書かれた文章は勿論のこと、臨床において感じる相手から発せられる雰囲気、ほんの少しの身体の動き、微妙な顔の表情等の非言語による訴えの全てが「叫び」となる。

- 10) キッペス氏は「精神」が多義的に使用されていることに注意を払い、「精神」に関しては「心理」「スピリット」及び「心」という表現を用いることを明示している。(キッペス [2009] p 153)

配置され、それだけが一つの円を上下に分割して一つの円を形成し、六つの次元の核となっている¹¹⁾。

ここで注目すべき点は、魂と霊 (spirit) の関係である。この二つは同じ層を二分割しているのであるが、それが人間存在の核となっている。すなわち魂と霊 (spirit) との関係性は、離れない二つでありながら、二つにして一つという不離不一というあり方を示している。魂については上記に挙げたように「不滅な自分・自我・自分自身・私・全身全霊」という人間一人一人の個に関係するものである。(例えば、魂の叫びといった場合、個人の魂の次元からの人間そのものとしての叫びであるということができる。) では、霊 (spirit) はいかなる事柄を指し示しているのであろうか。先に字義や翻訳における霊 (spirit) の理解を確認した。ここではその本質についてのキッペス氏の議論を検討する。

スピリチュアルという言葉は、人間に根源的に備わっている霊 (spirit) から派生したものと捉えられている¹²⁾。キッペス氏は日本社会に霊 (spirit) を説明するのが難しいと前置きした後に、「西洋では基督教の影響で〈霊 spirit〉や〈霊的 spiritual〉は、日常生活にごく当たり前のこととして根付いている¹³⁾」と述べている。当然のようにキッペス氏の霊 (spirit) 理解は『聖書』に依拠しており、「人間は霊 (spirit) によって生かされ、人間は霊 (spirit) の住まいである」とされ、神の霊 (spirit) が人間に宿っているということを基本にしている¹⁴⁾。また、霊 (spirit) は、身体のない純粋なものとして存在し、更に知性／自由意思／心／魂が含まれるとも述べている¹⁵⁾。更に、霊

11) キッペス氏による核の理解についてはキッペス [2009] p 25 参照。「核とは人間の中心、中核・内面・人間の根底、人間を活かす力・パワーである」と述べている。

12) キッペス [2009] p 10

13) キッペス [2010 a] p 23

14) キッペス [2010 a] p 32

15) キッペス [2010 a] p 38 なお、「霊 (spirit) には善悪があり、悪の霊によって、動物よりも更に低いレベルに落ちて滅びてしまう可能性もある」と述べ、「悪」そのものについても論じているのであるが、本稿において「悪の霊」「悪霊」「悪魔」

(spirit) は、その人が持つ雰囲気、感覚、思考、心の持ちようにも作用し、その人の周囲にも影響を与えるものであって、それをその人の「靈性 (spirituality)」であるとしている。

ところで、キッペス氏は、靈 (spirit) を次のように定義する。

人間にとって五感で確認できる現実は全てではないことを自ら悟らせてもらい、このような現実を超越した背後に含められるすべての存在意義や価値を把握し、人生の目標 (天命) に向かわせる舵となるものや存在そのものとの一体感を与える源泉である。さらに人間の自由意思に基づいてともに生きられる責任ある行動を可能にする内面的な能力・パワーであり、心をはじめ知性・心理・身体を活かす力・息・気力でもある。これらによって、はじめて、人間は本能的、能動的、宿命論的ではなく、責任を持って自分らしい本来の生き方が可能になる¹⁶⁾。

靈 (spirit) の中に様々な要素を取り込んでいるが、五つのキーワードで把握することができる。すなわち、A「五感以外を悟らせるもの」、B「現実を超越した存在の価値を把握させるもの」、C「存在そのものとの一体感を与える源泉」、D「自由意思に基づいてともに生きられる責任ある行動を可能にする内面的な能力・パワー」、E「心をはじめ知性・心理・身体を活かす力・息・気力」の五つである。これらが「靈 (spirit) とそのはたらき」である。

そのような靈 (spirit) が人間に与えられ、靈 (spirit) がはたらきを成すことによって「人生の目標 (天命) に向かわせる舵」となり、「責任を持って自分らしい本来の生き方」を可能にさせる。これが「靈 (spirit) のはたらきに

「悪」については扱わない。(キッペス [2009] p 21~24, キッペス [2010 a] p 37 参照)

16) キッペス [2009] p 10, キッペス [2010 a] p 38, キッペス [2010 b] p 28 を参照。それぞれに若干文節の異動があるが、内容は同じである。この箇所はキッペス [2009] に依った。

よる生き方 (spirituality)」となる。

筆者はキッペス氏の霊 (spirit) の定義から、このような「霊 (spirit) とそのはたらき」と「霊 (spirit) のはたらきによる生き方」という二つの要素を見出す。

そのうえで、キッペス氏の霊 (spirit) 理解に関し疑問点が二つある。

第一は、定義中にある身体／知性／心理／心と霊 (spirit) とが、どのような関係を織りなしているのが明確ではない。次に、キッペス氏による霊 (spirit) の定義の中に、六つの次元における霊 (spirit) と共に核を成しているはずの魂が抜けており、その理由や説明が全くなされないまま論が進んでしまっている。この二点は、キッペス氏によって今後補完されるべき問題であると捉え、本稿でのこれ以上の論述は差し控える。ただ、キッペス氏による六つの次元にもとづく人間観がもたらす利点と、筆者の批判を述べておきたい。

まず、人間が六つの次元を持っているという人間観の利点は、医療従事者との連携の中で患者・家族へのスピリチュアルケアを提供する際に、どの次元に対してケア提供者が関わるのかを明確にする。裏を返せば、スピリチュアルケア提供者が関われない次元（例えば身体や精神、心理等）については立ち入らずに、医療従事者に任せるべきであるという明確な境界線を設けることに繋がる。その逆もしかりである。すなわち六つの次元にもとづく人間観を共有することによって、医療従事者とスピリチュアルケア提供者との間の役割分担が明瞭となり、相互補完的かつ全人的ケアが可能となる。

しかしながら、この六つの次元にもとづく人間観や、霊 (spirit) の概念を医療従事者が受け入れられない場合、キッペス氏のケア理論を共有することが難しくなる。この場合、先に述べた境界線が医療従事者とスピリチュアルケア提供者の間から消失し、相互補完の関係は崩れ、互いの専門性を十分に発揮することが難しい状況になる可能性がある。これはキッペス理論だけの問題ではなく、臨床の場にいる筆者自身の課題でもあり、スピリチュアルケ

アに携わる全ての者にとっての課題である。スピリチュアルケア提供者が個人レベルでそれぞれの理論の中から学び、自らが持っている人間観確立や、スピリチュアルケア理論を深めていき、その過程で見えてくる相違点や、自らの内面に生じてくる違和感を統合し、他職種に向けてスピリチュアルケアの対象と方法を発信していくことが重要である。

そのような観点にもとづいて鑑みるに、筆者の仏教的立場からいくつかの論点が浮かび上がってくる。

仏教の中にも様々な人間理解が説かれているが、基本的な考え方の一つに「五蘊」がある¹⁷⁾。「五蘊」とは、人間がいか（身体を含め）対象を認識しているかを捉えたものである。身体的・物質的な面である「色」と、心的側面である「識」があり、「色」を「識」が認識するまでの過程を「受（身体的・物質的存在の感受）」「想（感受した物柄の表象）」「行（表象によって心を動機付け、行為に向かう）」と捉える¹⁸⁾。「色」「受」「想」「行」「識」それぞれの面は分節されて考えられているが、仏教思想は、それらを固定的・実体的・不変的に捉えない。むしろ「色」「受」「想」「行」「識」の全体が「無常」（常

17) 他に、十二処（眼・耳・鼻・舌・身・意とその対象である色・声・香・味・触・法）や、十八界（六種の心のはたらきと、それぞれの器官の六根と対象となる六境）などがある。

18) ここでの五蘊理解は原始仏教（初期仏教）における理解である。「第一の〈色〉は、十二処・十八界の中のその語よりも広義に、すべての物質的存在を意味する。第五の〈識〉が心を意味し、人間の存在の内界、主観の側を表すのに対して、この〈色〉はその対象、すなわち人間存在の外界、客観の側を、人間自身の肉体をもその中に含めて、表すのである。残る中間の〈受〉〈想〉〈行〉は、〈識〉すなわち心、すなわち内界、が〈色〉すなわち物、すなわち外界、と接触して生ずる心理的反応の次第を挙げたものと解し得る。〈受〉は六識が六根を通して六境に接触しますそれを感受することである。〈想〉は感受したものを表象すること、〈行〉は表象によって心が種々に動機付けられて行為に向かうことである。このように見れば五蘊は、心と心の対象である物と、心が物に向かったとき生ずる心的反応の三段階と、を挙げて、それによって人間の体験的生の〈すべて〉を代表せしめたものに他ならない。（中略）われわれは、原始仏教において問題とされている存在が、人間の生の体験との関わりを離れて自然界それ自体などにまで及ぶのではなくて、ただおのれが見、聞き、ないし思う限りのこの世界の〈すべて〉に留まっているのだということを、明らかに知らしめられる。」（桜部 [1974] p 24～25）

ならざるもの)であり、互いに影響を及ぼし関係しあいながら存在する「五蘊仮和合(「色」「受」「想」「行」「識」が仮に統合されている)」の状態が人間であることを明らかにする。

この「五蘊」にもとづく仏教的人間観は、スピリチュアルケアの対象となる「心」「霊(spirit)」「魂」や他の次元がそれぞれ実体として存在している、とするキッペス氏の人間観と大きく異なる。まず「心」「霊(spirit)」「魂」や六つの次元が、固定的・不変的なものかが問われる。もしも固定的・不変的なものであるとすれば、どの次元に関わったとしても、次元が固定的・不変的である為、関わることによる変化や効果が見えなくなる。

次に、六つの次元間の関係性が重要な問題となる。仏教的人間観における「色」と「心」は、個々独立したものではなく、関係性に依って存在する。これを各次元に当てはめれば「色」は身体次元であり、「心」は狭く捉えれば「心」「霊」「魂」であり、広く捉えれば「心理」「知性」「理性」をも含む。仏教的人間観にもとづく限り、仮に分断されたとしても、それぞれの関係性によって人間が存在するという観点に立ち戻ることが可能となるが、六つの次元が分断されただけに留まるのであるならば、人間はそれぞれの次元を担当する援助者によって分断されたままになる。これは、近代の機械論的な人間観に繋がっている。

つまり、キッペス理論においては、スピリチュアルケア提供者は「心」「霊(spirit)」「魂」に関わると規定される訳であるが、「五蘊」にもとづく仏教的人間観からみると、「心」「霊(spirit)」「魂」の次元のケアが、他の次元へと影響を与える。例えば「心」に関わった場合でも患者の身体である「色」にも影響があるということになる。もし、キッペス氏の次元理解が関係性の中で語られるとするならば、スピリチュアルケア提供者が関わる「心」「霊」「魂」の次元と、医療従事者が関わるとされる「身体」「知性」「心理」とが、どこかで必ず重なりあうことになる。キッペス氏による六つの次元による人間理解は、ケアの効果を考える際に最も重要であるこの点について、十分に展開

されていないのである。

第二節 キッペス理論におけるスピリチュアルケア提供者教育プログラム

チームアプローチとして、スピリチュアルケア提供者と医療従事者が協働することが重要である。キッペス氏の六つの次元にもとづく人間観がどのように教育され継承されているのか、その教育プログラムはいかなる特徴を持つのかを考察することが、臨床実践を念頭においた場合に不可欠である。

冒頭において、キッペス氏が現在に至るまで日本におけるスピリチュアルケアの普及、ならびにスピリチュアルケア提供者育成に尽力していることを述べた。その中心的役割を果たす機関が、キッペス氏が理事長を務めるNPO法人臨床パストラル教育研究センター（以下、同センターと略す）である¹⁹⁾。同センターには六つの哲学があり、その最初に「人は、身体・知性・心理（精神）・心・霊・魂からなる尊厳である」と掲げられており、前節において考察したキッペス氏の人間観が反映されている。また、同センターの特質の一つとして、

キリスト教哲学に基づくと同時に諸宗教、異なる信条・信念も同様に尊重して臨床パストラルケア（スピリチュアルケア）（心・霊spirit・魂の専門的ケア）に携わることのできる人材を育成する²⁰⁾。

と掲げられている。同センターが育成しようとする人材とは、まずキリスト教哲学にもとづく人間であり、かつ多宗教・他の信条、信念も尊重できる

19) なお、本稿ではスピリチュアルケア提供者養成プログラムを中心に扱った。それ以外の理念、歴史、全国的な展開、提携病院等については同センターのHP（<http://pastoralcare.jp/>）を参照して頂きたい。

20) 同センターHP参照（<http://pastoralcare.jp/>）

者でなければならない²¹⁾。そのような人材が「臨床パストラルケア＝スピリチュアルケア＝心・霊 (spirit) ・魂の専門的ケア²²⁾」に従事することができるということになる。

では、そのような人材育成のために、どのようなプログラムが組まれているのであろうか。キッペス氏は臨床パストラルケア教育に関して次のように述べている。

医療に携わる人々は、だれでも「スピリチュアルケア」ができると思われるかもしれないが、全人的（哲学的、宗教的を含む）基盤の上に立つたしっかりとした教育を受ける必要がある。臨床パストラルケア教育と研修の存在意義はそこにある²³⁾。

キッペス氏がスピリチュアルケア提供者養成プログラムの基盤に、全人的・哲学的・宗教的な教育を据えていることが理解できる。それにもとづき同センターにおいて開設されているのが以下の臨床パストラルケア・ワーカー／カウンセラーの資格認定コースである²⁴⁾。

21) キッペス氏によれば、スピリチュアルケア提供者の資質は「スピリチュアルな人格者、つまり〈ヒト〉となるように努力している者である」とされ、マザー・テレサ、マーティン・ルーサー・キング、マハトマ・ガンジーらの名前を挙げている。また、「スピリチュアルケアを提供する人は、自分なりの〈スピリチュアルな人〉の定義を工夫し、それに沿って自分自身のスピリチュアルな人格を形成しながら、日常生活の出来事を通してその定義を訂正していくのである。」として、自分自身がスピリチュアルな人格になるよう生活することが述べられている。(キッペス [2010 a] p 180～183)

22) 同センターの特質に掲げられている文言に従えば、「臨床パストラルケア（スピリチュアルケア）（心・霊spirit・魂の専門的ケア）」であるが、同センターが掲げる特質や、人材育成の項目では「臨床パストラルケア（スピリチュアルケア）」となっており、臨床パストラルケアとスピリチュアルケアは同義であるように記載されている。

23) キッペス [2010 a] p 171

24) 同センターには、医療従事者や病床訪問ボランティア向けの一般研修コース（1日研修会15回）もある。なお、キッペス氏の述べているプログラムと、同センター

●資格認定予備課程

- ・「人間関係とコミュニケーションの研修会、傾聴（5日間）」
- ・「価値観の明確化（3日間）」
- ・ブックレビュー（1冊）、個人またはグループのスーパーヴィジョン1回

●資格認定前期課程

- ・臨床教育研修（5日間×2回）
- ・ブックレビュー（2冊）
- ・訪問記録検討を受けた記録の提出（4回）
- ・人生の分かち合い（1回）
- ・個人スーパーヴィジョン（1回）

●臨床パストラルケア・ワーカー資格認定

（資格認定前期課程修了後、以下の条件を満たした場合に申請可能）

- ・自己の信念の基盤となる哲学、または神学講座20時間受講
- ・スーパーヴィジョンを受けた訪問記録の提出（6回）
- ・スーパーヴィジョンを受けない訪問記録の提出（10回）
- ・ブックレビュー（3冊）

●資格認定後期課程（前期課程修了者のみ受講可能）

- ・臨床教育研修（5日間×4回）
- ・ブックレビュー（2冊）
- ・スーパーヴィジョンを受けた訪問記録の提出（8回）
- ・人生の分かち合い（1回）、個人スーパーヴィジョン（1回）

がweb上に公開しているプログラムが異なっていたため、更新日時にもとづき同センターHPを中心にまとめた。（キッペス [2009] p 144～146）

●臨床パストラルケア・カウンセラー資格認定

(資格認定後期課程修了後、以下の条件を満たした場合に申請可能)

- ・自己の信念の基盤となる哲学、または神学講座 100 時間受講
- ・スーパーヴィジョンを受けた訪問記録の提出 (6 回)
- ・ブックレビュー (2 冊)、同センター所定の書類提出

このように、資格認定予備課程から資格認定後期課程、臨床パストラルケア・ワーカー、臨床パストラル・カウンセラーの資格認定まで整備され、充実したプログラムが用意されている。このプログラムの特徴は、資格認定に際して「自己の信念の基盤となる哲学、または神学講座」を臨床パストラルケア・ワーカーであれば 20 時間、臨床スピリチュアルケア・カウンセラーであれば 100 時間受講しなければならないという点である。これは他のスピリチュアルケア提供者育成団体と比較しても大きく異なり、同センターの専門職養成プログラムを最も特色付けている。哲学・神学講座の受講時間の多さの理由は、キッペス氏の次のような発言から裏付けることができる。キッペス氏は医療界におけるスピリチュアルケアの流行に対して、「安易に理解できるほど単純な事柄ではない」「誰でもできるものではないし、誰でも理解できるものではないのである²⁵⁾」と警鐘を鳴らし、次のような指摘をしている。

心と魂の痛みに対するケアは、上述の医療従事者の時間不足からくるような問題ではなく、その内容が自然科学ではなく精神科学の科目、倫理学や哲学、人間学や宗教学の領域だからである²⁶⁾。

心と魂のケアとは、上記のような哲学・宗教・倫理学・人間学（筆者の言い方であれば人間観）など人間を深く追究してきた学問を背景とした領域で

25) キッペス [2009] p 130

26) キッペス [2009] p 131

あることを明言している。つまり、スピリチュアルケアは、自然科学を基盤としてきた医学や看護学と全く異なった学問領域に根ざしていると述べているのである。

哲学や宗教などは、長きにわたって「生きる意味」「苦悩の意味は何か」「なぜ痛み、老い、死ななければならないのか」などを問い、人生への意味付けや救済を求めてきた大きな体系である。哲学や宗教などを一つでも深く学ぶということは、現代に至るまで脈々と受け継がれてきた歴史的伝統の体系に触れることである。

キッペス氏や同センターにおいて、こうした哲学や宗教などの学問領域をなぜ長時間にわたって学ばねばならないのか、という理由が説明されていないが、筆者はこの点がキッペス理論にもとづく専門職養成プログラムの核であると考えている。哲学や宗教などを学ぶといえども様々な学び方がある。ともすれば、難解な文献の上に書かれている意味をなぞるだけに貴重な時間を費やしてしまう恐れもある。勿論、テキストを忠実に読解することも非常に大切なことであるが、スピリチュアルケア提供者を育成する専門職養成プログラムにおいて学ぶべき哲学や宗教などの学問領域とは、テキストを読み込んでいく中で自身の存在する意味や、自らの世界観が問われるという性質を持った学びである²⁷⁾。それは自己の内面においていかなる価値観を持っているか、いかに自らの存在の意味付けを行っているかという自己洞察が、テキストの読解に伴いながら促進されることである。テキストの読解とは、自らが触れてこなかった、あるいは今まで気付いていなかった価値観の体系（超越的存在や超越的世界など）に出会い、気付きや新たな視点を得る契機となる。そして臨床に赴くスピリチュアルケア提供者の基底となる。

次に、キッペス理論にもとづく専門職養成プログラムについての懸念を若干述べておきたい。哲学や宗教などによる学びとその必要性を論じたが、ス

27) 筆者が「テキストを読み込む」としている中には、ブックレビューや哲学・神学講座のテキスト全体を含んでいる。

スピリチュアルケア提供者自身がある一つの哲学や宗教などに偏重しすぎてしまう可能性も生じてくる。自らが選び取った哲学や宗教を保持し、ケアに生かすことは非常に大切な事である。しかし、それが相手の哲学や宗教などに対する寛容性を失い、臨床の場において患者とのやり取りが素直に出来なくなる恐れがある。また、全く異なった宗教的背景を持った患者に対して排他的になり、反駁をするような心が起きる可能性もある。そういった点には十分に注意しなければならない。キッペス氏も「傾聴のポイントと注意点」の中で次のように述べている。

著者は宗教を持っているので、物事を宗教的背景から観察し、考えるとき、話を聴くときや他者と対話するときにも、宗教の概念が入ってしまう傾向がかなり強い、それによって相手を操作（指導）する危険が増す²⁸⁾。

さらに、キッペス氏はカトリックの信仰を持つが故に、傾聴以外の、物事の観察、思考、他者との対話に関しても宗教的概念が入ってしまう傾向があると述べている。すなわち日常の様々な場面で宗教的な見方をし、宗教的な思考がはたらき、他者との対話においても宗教的な面が現れ、「それによって相手を操作（指導）する危険が増す」ことを明示している。筆者も親鸞浄土教を宗教的背景に持つ者としての自戒としておきたい事柄であり、同センターの専門職養成プログラムを受講する者にとっても、この点は大きな戒めとなる。

スピリチュアルケア提供者自らが依って立つ哲学や宗教などを重要視し、多くの時間を設けている専門職養成プログラムは非常に特色があり、それが大きな強みになる。同時に、受講するスピリチュアルケア提供者が自己の依拠する哲学や宗教などを偏重するという懸念もある。これら両面の調和を目

28) キッペス [2009] p113

指す方向に向かうことが理想であろう。次節においては、そのプログラムによって育成されたスピリチュアルケア提供者のケアの内実について考察を深めていくこととする。

第三節 キッペス理論について

本節においては、上述のプログラムによって育成されたスピリチュアルケア提供者がいかなるケアを提供するのかという点について考察を行うが、先にキッペス氏が考えているスピリチュアルケアを提供する場面や対象について論じておきたい。

キッペス [2010 a] においては、副題にあるように病人、病人の家族、(病人の) 友人、医療スタッフ等、医療を中心としたスピリチュアルケアに焦点を当てている。他にもいのちの電話／希望の電話／インターネット等によるスピリチュアルケアや、軍隊・消防隊・警察・刑務所・空港²⁹⁾などの機関、教育現場など実に幅広く様々な場面が想定されている³⁰⁾。

では、それらの場所で具体的に行われるキッペス理論とはいかなるものであろうか。第一節で考察した六つの次元との関連では、スピリチュアルケア提供者は心・霊 (spirit) ・魂に関わると述べていた。それらの関係についてキ

29) キッペス氏によれば、ドイツの空港では臨床パストラルケア部が設置されていることが普通であり、ドイツ政府は2004年12月16日に起こったスマトラ島沖大地震と津波によって被災した国や地域からの帰還者とその家族のために空港内に緊急臨床パストラルケア部を設置・増員して危機的状況に置かれた人々を援助したという。筆者は、東北太平洋沖を震源とする東日本大震災による地震と津波の光景をバンコク空港内のTVにて知った。バンコク空港内には六つのprayer's roomが設置されており、筆者は宗教的な目的での使用許可を求めたが、「ムスリムの為の部屋である」という理由から使用許可が得られなかった。また同空港にチャプレンは配置されていなかった。

30) キッペス [2009] p 103 参照。長野オリンピック／パラリンピックでは、選手村の中に宗教センターが開設され、選手付きチャプレンによるケアがなされていた。(キッペス [2010 a] p 339) また、スピリチュアルケアの対象は人だけではなく、病院や病院の廊下、病室といった患者の環境が平安であるように祈ることや、患者の食べる病院食や治療行為が患者の病気を改善するように祈ることもスピリチュアルケアであると述べている。このような場合、キッペス氏はそれらをいかなる次元においてみるのかは明らかでない。(キッペス [2010 a] p 331)

ッペス氏は次の二つを挙げている。

スピリチュアルケアは患者が人間として心・霊・魂が成長するための援助である。祈ることはその一つ的手段である³¹⁾。

スピリチュアルケアは心・霊・魂との関係を結ぶ行為である。心と心、霊と霊 (spiritとspirit)、魂と魂の関係を深める努力と協力である³²⁾。

六つの次元における心・霊 (spirit)・魂に対してスピリチュアルケア提供者が関わる場合、スピリチュアルケアとは、それらの成長を援助する行為であり、相手の心・霊 (spirit)・魂との深い関係を構築していく行為であるとされる。そして、スピリチュアルケアは単に患者をケアするだけではなく、患者の心・霊 (spirit)・魂の次元において協力し、スピリチュアルケア提供者自身のうちにある心・霊 (spirit)・魂のレベルで応答する努力が求められる、いわば患者との共同作業を行うケアと把握することができる。共同作業とは、ケアする者とケアされる者という上下の関係にあるのではなく、心・霊 (spirit)・魂の次元においてスピリチュアルケア提供者と患者は同じ地平に立つ者同士になるということである。

このようにキッペス氏はスピリチュアルケア提供者が関わる次元を心・霊 (spirit)・魂の次元としていることが確認できた訳であるが、それらの次元に関わるケアの定義はどのようなになっているのであろうか。

キッペス氏はスピリチュアルケアの基本的な定義を挙げつつも、パストラルケアが「スピリチュアルケアと根本的に同様」「臨床パストラルケアは根本的にスピリチュアルケアであるからである³³⁾」と述べており、スピリチュアル

31) キッペス [2010 a] p 316

32) キッペス [2010 a] p 262

33) キッペス [2010 a] p 154

ケアとパストラルケアはほぼ同じであるという理解を示している。その為、ここでは、スピリチュアルケアのみを考察するのではなく、パストラルケアの定義も同時に取り上げ、それらの関係性について考察する。

スピリチュアルケアの定義

生の根源との一致を促すパワーによって、

自他の生との一致を目指す相互の努力と協力である。

つまり

自他の誕生と死、健康と病氣、喜びと苦難などを含む人生の意味や価値

を（再）認識し、受容し、

自他が本（物）の自分になるための働きかけである³⁴⁾。

（波線は筆者による）

パストラルケアの定義

スピリチュアルケアと根本的に同様である。

即ち、

自他の生の根源と一致するための相互の努力と協力である。

つまり

自他の生きる意味や価値を（再）認識し（理解し）、受容し、

自他が本（物）者の自分になるための働きかけである。

但し、この過程で信条／信仰／宗教の事柄に重点を置くことが特徴である³⁵⁾。

（下線は筆者による）

筆者がパストラルケアの定義に下線を引いた箇所は、スピリチュアルケアの定義に重なっている部分である。二つの定義は重なりあう箇所が非常に多

34) キッペス [2010 a] p 93

35) キッペス [2010 a] p 154

い。二つの定義における文言の異同を整理すると、スピリチュアルケアの定義に付した波線部分がパストラルケアの定義にはない部分であり、また、スピリチュアルケアの定義には、パストラルケアの定義にある「信条／信仰／宗教に重点を置く」という一文がない。ここに大きな差異が見られる。

筆者は、前々稿、前稿において、基本的にスピリチュアルケアと宗教的ケアとを区別して論じてきた。この箇所においても同様に「信条／信仰／宗教に重点を置く」場合のケアはパストラルケア（＝宗教的ケア）³⁶⁾であり、スピリチュアルケアと一応区別して理解することが可能であるとしてきた。スピリチュアルケアに宗教的要素が入ることは否めないが、ある程度の区別を設けなければ、両者が混同され、混乱を招く可能性がある。

しかし、キッペス氏の著作や、同センターのホームページ上の文章を読むかぎり、スピリチュアルケアとパストラルケアに定義づけられる程大きな区別が見られない。加えて、上記に挙げた定義は非常に抽象的であり、そこからスピリチュアルケアやパストラルケアの具体的なケアを理解することが難しい上、キッペス氏の著作には、二つの定義に沿って論じている箇所がない。つまり定義をしつつも、キッペス氏自身はスピリチュアルケアとパストラルケアとの間に明確な違いを感じておらず、両者の言葉の区別にあまり意味を見いだしていないように窺える。第一節で確認したように霊の字義や用例について緻密な考察を行っていたことに比べると、スピリチュアルケアやパストラルケアの定義に関しては非常に曖昧であると言わざるをえない³⁷⁾。定義に

36) 「信条／信仰／宗教の事柄に重点を置く」場合、必ずしもキリスト教に限定されない。ユダヤ教、イスラーム、仏教といった諸宗教に置換して読み込むことが出来る。その場合にはパストラルケアではなく、広く宗教的ケアと呼ぶのが適当である。

37) ただし、キッペス氏がスピリチュアルケアやパストラルケアの手法を示していないという訳ではない。キッペス [2010 a] 第七章は「スピリチュアルケア」と題され、スピリチュアルケアの要素として、①考え、②ことば、③共にいること、④信賴関係、⑤聴くこと、⑥見る目、⑦沈黙、⑧欲求不満の処理、⑨歌、の九つが紹介されている（キッペス [2010] p 110～151）。なかでも⑤聴くこと（傾聴）は、スピリチュアルケアの始まりであり、不可欠かつ中心的役割であると述べられて

従えば「信条／信仰／宗教の事柄に重点を置」いたパストラルケアとなるべきところを、スピリチュアルケアと表現する箇所が多く見られる。これはキッペス氏自身がパストラルケアとスピリチュアルケアを元々二通りのケアとして考えていないことに由来すると指摘しておきたい。そのように筆者が思考する背景として、キッペス氏がスピリチュアルケアの元来のあり方を述べている次の箇所に注目したい。

スピリチュアルケアはもともと、それを必要とする他者にキリストを運ぶ役であり、究極的に患者をこの世から天国に入国させるための心のケアによるキュア（cure癒し）でもある³⁸⁾

キッペス氏によれば、スピリチュアルケアの元来の形は、キリスト教の聖職者が患者にイエス・キリストの教えを説き、究極的な目的として患者が超越的世界である天国に行けるように導く心のケアである。ここには歴史上、聖職者による司牧・牧会として行われてきた病床訪問が念頭にある。様々な場所、様々な理由によって教会に通うことができない状況に置かれている信徒に対し、イエス・キリストの救いを伝え、超越的世界たる天国に迎え入れられることを説くというパストラルケアが、スピリチュアルケアの原型にあたと述べているのである。

この箇所を患者側から見た場合、スピリチュアルケア提供者を介して神の救いが伝道され、自らの心が天国を希求する心へと変化していくという非常に宗教的色彩の強いケアとなる。このようなケアのあり方は、「信条／信仰／

いる（キッペス [2009] p94ならびにp102）。この傾聴に関しては、キッペス [2003] において 200 頁以上にもわたって論じられており、キッペス理論による手法の中核をなしていると考えても差し支えない。また、傾聴は窪寺理論や大下理論においても中心的な手法として挙げられており、スピリチュアルケアの方法として定着していると考ええる。

38) キッペス [2010 a] p 174

宗教に重点を置く」というキッペス氏自身が定義付けたパストラルケアの範疇となるはずである。しかし、キッペス氏はパストラルケアとして述べている訳ではない。この点がキッペス理論を理解する鍵となる。すなわち、スピリチュアルケアの原型として上記のようなパストラルケアが先んじていたとするキッペス氏自身が、長年にわたりパストラルケアの実践をしてきており、スピリチュアルケアはパストラルケアから派生したケアとして捉えているのである。そのような流れに関連してキッペス氏は「臨床パストラルケア」の章の冒頭で次のように述べている。

WHOは緩和ケアを身体面、心理面、社会面およびスピリチュアルな面のすべてに対応する包括的な医療を構成しているものとして捉えている。

この定義の中の「スピリチュアルな面」は西洋の医療で伝統的に不可欠な位置をもってきた「(臨床) パストラルケア」の影響として考えられる。

臨床パストラルケアは根本的にスピリチュアルケアであるからである³⁹⁾。

キッペス氏はWHOの見解について、「臨床パストラルケアは根本的にスピリチュアルケアである」と断言しており、パストラルケアとスピリチュアルケアとの差異をみていないのである。

つまり、キッペス理論において、二つのケアの定義を厳密に比較して眺めるとスピリチュアルケアとパストラルケアを区別しているように映る。しかし、本質は伝統的にキリスト教聖職者達が行ってきたパストラルケアと変わらない。キッペス理論ではどちらか一つの定義に集約されていくようなあり方ではなく、また明確な区別がつくようなあり方でもない。たとえケアの内容がキリスト教の伝道を主眼としたパストラルケアの構図になっていたとしても、キッペス氏にとってはスピリチュアルケアであり、パストラルケアな

39) キッペス [2010 a] p 154

のである。

このように捉えることによって、キッペス氏が論じていたスピリチュアルケアの元来の形、すなわちキリスト教の伝統にもとづいたスピリチュアルケア(＝パストラルケア)に関する考察が必要となる。キッペス氏は「スピリチュアルケアとは～である」と様々な箇所でも論じており、著作を通じて定型を確認することが出来ない。筆者はキッペス氏が「スピリチュアルケアとは～である」と述べている箇所を抜粋し、テーマ毎に分類した。そのプロセスから見えてきたテーマとして、「キリスト教的スピリチュアルケア」、「祈りとスピリチュアルケア」、「共にいるというスピリチュアルケア」「エンパワメントとしてのスピリチュアルケア」「使命感とスピリチュアルケア」「統合する援助としてのスピリチュアルケア」等が上がってきた。これらの多くについては当該箇所の読解によって理解可能なものが多い為、以下「キリスト教的スピリチュアルケア」に焦点を絞って考察する。

まずスピリチュアルケア提供者の信仰背景について、キッペス氏は以下のように述べている。

キリスト教徒のスピリチュアルケアの根底には「命の友」「病む人の癒し主」であるイエス・キリストがいる。イエス・キリストは病む人、貧しい人、苦しむ人に対して全人的な配慮(ケア・愛)で関わり、どん底の状態(物質的、社会的、心理的、スピリチュアルな生活)にある人々を立ち上がらせてくれた。イエス・キリストは絶望のどん底にあった人々を救い上げ、神のみ前における本来の人間としての品位を授けられたのである⁴⁰⁾。

この箇所において、イエス・キリストが絶望の底にあったいかなる人に対

40) キッペス [2010 a] p 305

しても全人的な配慮でもって関わり、救いあげて本来の人間としての品位を授けたとされる。スピリチュアルケア提供者は、イエス・キリストを「命の友」「病む人の癒し主」として真に理解し、自己の中に位置付けている者である。ここで、イエス・キリストを自己の中でどのように位置付けているかという点が問題となってくる。その答えの一つとして、筆者が前節で述べたキッペス氏が主宰する同センターでの専門職養成プログラムにおける哲学・神学講座非常に重要な意味を持ってくる。その哲学・神学講座の中で明らかになったスピリチュアルケア提供者の信念や信仰がここで問われてくるからである。

すなわち、前節で述べた、テキストに対して自己を問うような読解により、イエス・キリストを「命の友」「病む人の癒し主」として自らの内面に位置付け、自身の核や根底とすることによって初めて「キリスト教のスピリチュアルケア」は成り立つのである。

次の一文は、「キリスト教のスピリチュアルケア」の具体的な関わりが述べられている。

キリスト教に基づくスピリチュアルケアは、神が人間を無条件に肯定され、共におられ、助け、癒してくださることを伝えたいと願うものである。もちろん、それは無理強いするものではなく、一人の人間として、仲間として、患者に自分が善いと思う物を紹介し、提供するものである。患者が自分の人生の道を見つける助言を提供するだけである⁴¹⁾。

この箇所の前半部分においてキッペス氏はキリスト教にもとづくスピリチュアルケア⁴²⁾について論じている。スピリチュアルケア提供者が、自らの中の

41) キッペス [2010 a] p 306

42) キッペス氏は次のようにも述べている。「スピリチュアルケアが宗教によって異な

善である神の無条件の救い、神の臨在、神による癒しなど患者に伝えたいとする願いがスピリチュアルケアであるとされている。そして、スピリチュアルケア提供者の中に沸き起こった願いは、単に心の内に留まらず行動を伴う。願いにもとづく行動とは、「一人の人間」「仲間」という立場から患者に対して、自らが善と価値付けているキリスト教の教義を伝道する行為に結びつく⁴³⁾。

この文脈では患者の信仰・信念が明らかになっていないが、スピリチュアルケア提供者が善であると自身が価値付けている信仰を、未だ確立していない患者へとキリスト教の教義を伝道するという構図として読み取れる。このようなケアのあり方は、「信条／信仰／宗教に重点を置く」ことを主眼としたパストラルケアであり、キッペス氏が元来のスピリチュアルケアの形とするケアのあり方である。

キッペス氏はこの行為を「無理強いするものではない」「助言を提供するだけ」と述べている。このキッペス氏の指摘は、筆者が前々稿、前稿でも論じた宗教的ケアにおける問題と重なる。ここで取り上げたキッペス氏の文脈から言えば、スピリチュアルケア提供者が善と意味づけている無条件の肯定・救済・癒し等が、提供された患者にとっても善であるとは限らないということである。「キリスト教のスピリチュアルケア」において、善とされるのはあくまでスピリチュアルケア提供者自らの価値観による善であることに留意し

っているのは当然である。筆者はキリスト教徒であるので、キリスト教的背景から課題を提供する。」(キッペス [2010 a] p 305)

- 43) 他の行為としてキッペス氏が重要視しているのが「祈り」である。キッペス氏は次のように述べている。「スピリチュアルケアの中心的役割の一つは、祈って欲しいと願う病む患者や家族・友人と共に祈り、心の苦痛を和らげ、心の平安と支えになる手助けをすることである。キリスト教的に祈ることは人間の源である神との関係を(再)確認し、神は創造主、人間は被造物であることを認める行為である。」(キッペス [2010 a] p 310)「祈ることは、救いを求めることである。スピリチュアルケアの提供に当たって、祈りは非常に重要な位置を占めている。共に祈ることは、患者と共に病氣と闘うことである。それは人間(患者)の存在が究極的には、人間を超えている存在(神)の御手の中にあることを患者に示す。」(キッペス [2010 a] p 308)

なければならない⁴⁴⁾。

このような留意点は、宗教的背景は異なるが、ここまで論じてきた三氏に共通する宗教的ケアの問題である。そして親鸞浄土教を基底とする筆者にも課せられた課題でもある。この点については稿を改めて述べることとしておきたい。

なお、五蘊にもとづく仏教的なケアの中心は、脚注18に引用した桜部論文にある「原始仏教において問題とされている存在が、人間の生の体験との関わりを離れて自然界それ自体などにまで及ぶのではなく、ただおのれが見、聞き、ないし思う限りのこの世界の〈すべて〉に留まっているのだ」という存在理解である。すなわち、存在を実体として理解するのではなく認識論として還元する。この認識に向けてのケアが課題となる。詳しくは論を改めて検討する。

小結

キッペス氏は自らの信仰背景であるキリスト教の理解を通して、人間が六つの次元から成ることを明らかにし、なかでも心・霊 (spirit)・魂の次元は、スピリチュアルケア提供者のみが専門的に関わる次元であることを強調する。筆者はスピリチュアルケア提供者と他の医療従事者との間で関わる次元を区別することによりチーム医療が成り立つという利点を指摘しつつも、仏教における人間観としての「五蘊」にもとづいた問題提起を行った。特に、心・霊 (spirit)・魂の次元への関わりが、他の次元へどのような影響をもたらすのかということについては、キッペス氏自身による立ち入った議論の必要があるとした。

44) この点についてキッペス氏自身も失敗を披瀝し反省を述べている。一つは「友人への祈り」であり、もう一つは「うつ病になった禅の研究者に対する使命感の押しつけ」である。(キッペス [2010 a] p 314 及びp 220~221) 筆者は、キッペス氏が反省を述べているような宗教的背景を持ったスピリチュアルケア提供者による一方的な宗教的ケアに対しては批判的である。

キッペス理論にもとづく専門職養成プログラムは、これまで論じてきた他のプログラムと比較して哲学や宗教等を重要視するという大きな特色が見られた。筆者はそのような学びによって、自己の存在意義や価値観、世界観への気付きをもたらす面と、一面的な見方に陥る懸念があると論じた。

第三節ではキッペス氏によるスピリチュアルケアとパストラルケアの定義の問題を取り上げた。キッペス氏はそれぞれを定義しているものの、定義自体が抽象的であり、その語の使用も曖昧である。キッペス氏の著作では「スピリチュアルケアとは～である」とする文脈が多く、筆者はそれらの整理・分析を行った。その結果、「信条／信仰／宗教に重点を置く」ことを主眼としたパストラルケアの構図が含まれており、キッペス氏がスピリチュアルケアとパストラルケア（＝宗教的ケア）を同義に扱っていることが明らかとなった。また、キッペス理論では、専門職養成プログラムでの哲学や宗教等からの学びがケアのあり方に影響を及ぼすことも指摘した。

次稿においては、村田久行氏によるスピリチュアルケア理論を考察する予定である。

参考文献・論文（著者名、50音順）

- | | |
|--------------|--|
| 打本弘 [2009 a] | 打本弘祐「スピリチュアリティ概念の多様性と宗教性」『真宗研究会紀要』41号 |
| 打本弘 [2011 a] | 打本弘祐「スピリチュアルケアの諸相（1）－窪寺理論をめぐって－」
『桃山学院大学社会学論集 北川紀男教授退任記念号』第44巻第2号 |
| 打本弘 [2011 b] | 打本弘祐「スピリチュアルケアの諸相（2）－大下理論をめぐって－」
『桃山学院大学社会学論集』第45号第1号 |
| キッペス [2003] | ウォルデマール・キッペス『ともに生きる－人間関係とコミュニケーション』サンパウロ |

- キッペス [2009] ウェルデマール・キッペス『スピリチュアルな痛み－薬物や手術でとれない苦痛・叫びへのケア－』 弓箭書院
- キッペス [2010 a] ウェルデマール・キッペス『スピリチュアルケア－病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア』 サンパウロ
- キッペス [2010 b] ウェルデマール・キッペス『病気は人として成長するチャレンジ』 弓箭書院
- 桜部 [1974] 桜部建「原始仏教・アビダルマにおける存在の問題」『講座仏教思想 第1巻「存在論・時間論」』所収, 理想社
- WHO [1993] 世界保健機構編, 武田文和訳『がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア－がん患者の生命へのよき支援のために－』 金原出版, 1993年

NPO法人臨床パストラル教育研究センター

会報誌「スピリチュアルケア」第49号, 2010年10月

【ホームページ】

NPO法人臨床パストラル教育研究センター <http://pastoralcare.jp>

(2011/11/18 アクセス)

Aspects of Spiritual Care (3) : Kippes Theory

Koyu UCHIMOTO

This is the third part of my project on spiritual care theory. Waldemar Kippes, a Catholic Father from Germany, has developed spiritual care theory in Japan based on his Christian faith. What is spiritual care theory of Kippes? Among his proposed six human dimensions in the theory, Kippes emphasizes that spiritual care providers relate mind, spirit, and soul to their professionally specialized areas of care. To create a better medical care team, it is important for spiritual care providers and healthcare professionals to distinguish the dimensions proposed by Kippes. In addition, in this paper I discuss the relationship among soul, spirit, and mind, and explain the consequences to other dimensions in care work. Kippes theory also offers suggestions for professional development programs. And one great characteristic of the proposed programs for care providers is a requirement of learning philosophy and religion. In this paper, I further elaborated upon definitions of “spiritual care” and “pastoral care” by Kippes. Today the word “Kippes” among spiritual care specialists in Japan is synonymous with spiritual care, pastoral care, and religious care. In Kippes theory, we must pay particular attention to Japanese cultural, religious and historical contexts.

Keywords : spiritual care, religious care, pastoral care, Waldemar Kippes,
Pure Land Buddhism of Shinran